（様式）

令和5年度 学校評価 学校関係者評価書

三木市立志染小学校

1 学校教育目標

心豊かに 元気よく 主体的に学ぶ子の育成

～ 元気なあいさつ 笑顔いっぱい みんなかがやく 志染っ子 ～

2 本年度の重点目標

・豊かな心と社会性の育成
・「確かな学力」の育成
・子どもの実態や内面理解に基づく指導の充実
・自立した人づくりに繋がる生活習慣の形成

3 自己評価結果（達成状況）【 A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない 】

評価の観点	評価項目（取組内容）	取組（達成）の状況	評価	改善の方策
学習指導	○確かな学力の向上を図る学習指導の充実 ・「学び合い」でつながり学びを深める授業づくり ・主体的に学ぶ子の育成	・朝の10分間の短時間学習「ホットタイム」では、デジタルドリルやプリント等を、学年の実態に応じた教材を使用して、計画的に学習を進められた。 ・ICTの活用や個別の課題設定等により、個別最適な学びとなるよう工夫した授業づくりができた。担任や教科担当で細かに打ち合わせを行いながら個別の課題に応じた指導ができた。 ・国語科を中心に、充実した交流場面となるよう授業研究を行った。児童は、対話での交流だけでなくICT等を活用するなど、多様な方法で自分の考えを伝え合うことができるようになってきている。 ・自ら考え学び合う学習の中に、交流によって互いに高め合うことができるような場を設けた。 ・主体的に学習する児童の育成を目指し、長期休業期間の一律の課題設定を廃止した。課題の例を挙げたチャレンジリストから児童が自分の関心や課題に応じて学習内容を選んだり、自分で学習したいことを決定したりして、自主学習として取り組むことができるようにした。取組状況に個人差はあるが、継続した取組によって自己調整力・自己学習力を高めていく。	B	・デジタル教材を効果的に活用し、児童ひとりひとりの課題にあわせた学力補充を行い、学力向上を図る。 ・個別最適な学びとなるよう、ICTの活用方法等について教職員で研修を深め、全ての児童の学力の向上に努める。 ・今後も、児童が「学び方を学ぶ」ことができる取組を行い、主体的に学習する児童の育成を目指す。 ・ALTと協働し、低学年から英語に親しみ、楽しく英語学習に取り組むことができるように、指導を工夫していく。
道徳教育	○全教育活動における道徳教育の充実 ○道徳的実践意欲の向上 ○家庭・地域との連携	・道徳教育全体計画をもとに、道徳科の学習だけでなく、他教科や総合的な学習、特別活動など教育活動全体を通じて、児童の道徳性を養うことができるよう取り組むことができた。 ・年度当初に各学年の児童の実態に応じて重点目標や年間指導計画の見直しを行った。年間計画を基に教育活動全体を通じて計画的に推進し、評価することができた。 ・道徳科の学習では、小規模校のよさをいかしてひとりひとりが考えを出し合い、じっくりと話し合いながら、学習を進めることができた。 ・「兵庫県版道徳副読本」を使っての親子読書を行い、家庭と連携した道徳学習の機会をもった。	B	・今後も、年度当初に各学年の重点目標や年間指導計画の見直しをし、すべての価値項目について計画的に学習を進めていく。 ・生活場面を取り上げたり体験的な学習を取り入れたりして、授業で考えた道徳的価値について実生活で実践しようとする児童の道徳的実践意欲をより高めていく。 ・今後も継続して、家庭や地域と連携した道徳教育の充実を図る。
人権教育	○全教育活動における人権教育の充実 ○家庭・地域・中学校区各学校と連携した人権教育の充実	・人権作文、標語、ポスター制作の前に、各学級で人権学習を実施することによって、児童が前向きに制作に取り組むことができた。 ・人権について全校生で学ぶ「友だち集会」では、人権劇を鑑賞したり感想の交流をしたりすることを通して、人権を大切にしようとする心を育むことができた。 ・人権教育の充実に向けて、地域の方を招聘した校内研修や親と子が共に学ぶ人権学習の事前研修会を実施した。地域教材への理解を深めると共に、人権学習の系統性や地域素材の教材化等について共通理解し、教職員の人権意識を高めることができた。 ・自他の良いところを見つける「かがやきの木」等の取組を通して、互いの良さを認め合い自分や友だちを大切にする心を育むことができた。 ・教育事業参観は、4年生とその保護者が教育事業について学ぶ貴重な機会となった。 ・「親と子が共に学ぶ人権学習」では、保護者とともに人権について考え、活発に意見交流をする姿を見ることができ、児童・保護者の人権感覚を高めることができた。	B	・多様な人権課題に対して、正しい知識と判断力を持つ子を育てるために、職員研修を充実させ、教職員の人権意識と指導力の向上を図る。 ・保護者・地域の方々と話し合う機会を多く持つことによって、子どもを取り巻く人権課題について共通理解し、取組における連携を強くしていく。 ・多様な体験活動を通して、児童の人権に対する豊かな心情を育む。 ・児童の発達段階に応じて系統的に指導していくことができるように、多様な人権課題について考える学習材を年間指導計画の中に組み入れていく。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

・児童・保護者・教職員に同内容でアンケートを取り、各評価項目での代表値を求め、その数値から評価を求める方法はよく整理され適切である。
・自己評価結果はアンケートの設問に大きく影響される恐れがある。アンケート結果を一つの基準としつつ、取組状況も踏まえ、定量的、定性的の両面から総合的に評価した結果と位置づける方が良いのではないか。いずれにしても、学外関係者にとっては、数回の授業参観で学校の全体把握は難しく、主にアンケート結果をもとに判断せざるを得ない。こうした点からも、アンケートの取り方、分析が重要と感じる。
・教職員のアンケート結果が他の2者より厳しくなっている。これはアンケートが児童・保護者に対しては「取組ができているか」を問い、教職員には「取組によって達成できたかどうか」を問う形となっていることによるものと考えられる。評価書においても、「取組（達成）の状況」という表現がある。取組の状況か達成の状況かで答え方は違ってくる。何らかの整理が必要かと思われる。
・児童・保護者の評価が高いことは、児童への指導は無論、保護者へ学校での取り組みの周知が行き届いていることの表れでもあると考える。教職員は自らの取り組みを常に厳しく、また、より高い目標をもって見つめていることから、厳しい評価になっていると考えられる。教職員の方々が高い目標を持ち、それに向かって努力し続ける姿勢が感じられ、非常に安心している。教職員の方々の積極的な取組や継続的な挑戦は、児童や保護者にとっても大きな信頼と安心感をもたらす評価となっている。教職員のアンケート結果については、学校全体の評価として、その内容について教員同士で意見交換をぜひお願いしたい。

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
・評価Bは適切である。 ・児童の92%が肯定的評価を選択しており、十分な学習指導が実施されていると評価できる。 ・外国語に関し、教職員を含め少し否定的評価があるため、改善策に期待する。 ・取組は多種多様で充実している。様々な取組が学力向上の達成にどのように働いているかの研究をしていただきたい。 ・児童たちはICTを活用した学習に積極的に取り組み、自らの課題に取り組む姿勢が見られ、自己表現能力や問題解決能力が向上している。ICTを通じて授業がより身近で興味深いものとなり、学習意欲がさらに高まるよう、引き続きICTを活用した学習環境を整えていただきたい。 ・個別の課題設定、長期休業中の一律の課題設定の見直しによる自主学習等、個別化による学習指導の充実が図られている。ICT活動と対話の場の設定という、個別と集団の特性をいかしていただきたい。 ・少人数であることを強みに、個別最適な学びを進めておられることを評価する。また、特定の児童の発言により授業が進むことのないように、意見集約の方法や発問に工夫がなされているとのこと。今後も授業の中で多様な意見が導き出せるよう研究・研修を積み上げていただきたい。 ・デジタルとアナログの利点を双方活かした指導を期待したい。一方で、児童と保護者の認識のズレも見受けられるため、学級懇談等の場を活用し、認識の補正をすることもより効果的な対策となり得ると感じる。
・評価Bは適切である。 ・児童回答数の94%、保護者回答数の96%が肯定的評価を選択しているほか、児童・保護者ともに否定的評価である「1」がゼロとなっていることは、この上ない高評価であると言える。また、児童・保護者・教職員の3者平均評価値が4.4であることも大変評価できる。 ・小中一貫教育を進めるにあたり、教科の別なく全ての教員が指導に関わる道徳授業の研究は有意義だと考える。児童も指導者も、ともに楽しいと思える道徳授業の創造を期待する。 ・児童だけではなく、多くの大人が道徳授業に関わる機会を持つことは有意義である。副読本を使った親子読書での感想を授業で共有するなど、工夫を凝らした授業実践の積み上げに期待する。 ・小規模校の良さを生かすと同時に、多様な考えにふれる機会を与えたい。考えや意見が固定化される傾向はないか検証し、反対意見やユニークで奇抜な意見にふれる機会として指導者からの揺さぶりを研究していただきたい。 ・児童たちが道徳の教育を通じて、思いやりや公平性、責任感などの道徳的価値観を身に付けている。日常生活等での行動において、他者への配慮や正しい判断を示す姿勢が見られ、社会への良き一員としての意識が育っている。引き続き道徳教育を通じて心豊かな人間形成を進めていただきたい。
・評価Bは適切である。 ・児童回答数の90%、保護者回答数の94%が肯定的評価を選択しているほか、児童・保護者・教職員の3者平均評価値が4.3であることは大変評価できる。 ・児童や教職員たちが人権教育を通じて、多様な人権課題に対する理解と尊重の意識を高め、正しい判断能力が向上している。差別や偏見に対する認識が深まり、相互理解や共生の大切さを実感している。引き続き人権教育を推進し、より包括的な学びの場を提供していただきたい。 ・時代や環境の変化に伴い、子どもを取り巻く人権課題がどこにあるかさらに研究してほしい。 ・親子で学習する機会は本当に大事なことだと考える。子どもと一緒に親の人権研修を進めていく必要がある。自分を大切にすること、そして人を大切にすることは、生きていく中で一番大事だと思う。 ・新たな人権課題に対して常に感覚をアップデートする機会の提供、自己有用感や自己肯定感を高める取り組みを精力的に進めていただきたい。 ・ダイバーシティーやノーマライゼーションという考え方や在り方を小学校教育の中で自然と体得し，未来につながる人権感覚を養っていけるよう継続的に指導いただきたい。

生活指導	○家庭と連携した 基礎的基本的事項の習慣化 ・場に応じた言葉遣い ○いじめや不登校児童を 出さない取組 ・「学校いじめ防止基本方針」 ・「学校IKOKAマニュアル」 ・「不登校対策プラン」	・あいさつや基本的な生活習慣、場に応じた言葉づかいを生活目標に設定し取り組んだ。生活目標は、毎月全校朝会で紹介し、学級単位で目標を決めて取組んだ。 ・場に応じた言葉遣いについては、生活目標の中で設定し、取り組んでいる、 ・生活チャレンジ週間では、児童の現状に合わせた目当てを設定して取り組んだ。 ・生活アンケートでは、いじめの項目に加え、睡眠時間など生活習慣についての項目を追加して調査した。 ・本年度、不登校及び長期欠席児童は児童なし。	B	・生活目標や生活チャレンジ週間では、来年度も児童の実態に合わせて目標を設定し、児童の成長が実感できるような取組を目指す。 ・集会等での継続的な指導と家庭との連携によって、基礎的な生活習慣やあいさつ、場に応じた言葉遣いなどの定着をめざす。 ・生活アンケートや面談を通して、いじめの未然防止・早期発見に努める。 ・「学校IKOKAマニュアル」や「不登校対策プラン」に基づき、予防・早期対応に努め、引き続き不登校ゼロを目指す。 ・中学校生活へのスムーズな接続に向けて、9年間の引継ぎシートを活用する。	・評価Bは適切である。 ・場に応じた言葉遣いについて、3者とも否定的評価が少し多い。 ・あいさつは毎日の基本であるため、「進んであいさつをしている」という項目については、全児童において否定的評価がない状態へと改善されることを期待したい。 ・児童たちの言葉遣いに対する生活指導やいじめや不登校を出さない取組が、児童たちのコミュニケーション能力や自己表現能力の向上にもつながっている。言葉の使い方や相手への配慮についての生活指導が徹底されて、プラスの人間関係の形成に貢献している。また、個々のニーズに合わせた支援や早期の問題発見・対応が行われており、いじめや不登校の発生を未然に防ぐことができている。ひきつづき、安心して学びを進められる環境を維持していただきたい。 ・取組は様々で充実している。成果として不登校ゼロを達成している。今後もその継続に期待する。 ・自身の成長に自身で気づくことはとても大切である。その意味でも、児童の設定する目標が適切であるかを、教職員がしっかりと判断し、児童により良いアドバイスができるよう、日常の児童の観察を重ねながらその観察眼を高めていただきたい。
特別支援教育	○児童理解に基づく 適切な指導と 必要な支援の充実 ○交流及び共同学習の推進	・個別の教育支援計画や指導計画を作成し、多様な学びの場と適切な指導・支援の工夫を重ねた。 ・児童理解研修・特別支援教育研修を複数回実施し、全職員が理解を深め、支援の工夫を知る時間を持った。 ・地域校交流・居住地交流を計画的に実施し、市立・県立特別支援学校と連携することができた。	B	・ひとりひとりの教育的ニーズに応じた多様な学びの場の工夫と支援方法の研修を重ねる。 ・すべての子が相互に理解を深めようと関わり合いながら学校生活を送ることができるよう、取組のねらいを明確にし、全ての学年において交流および共同学習を進めていく。 ・学び方の個性や外国にルーツをもつ子どもについての理解を深め、全教職員で子どもを見守る体制を整えていく。	・評価Bは適切である。 ・児童の否定的評価が少し多い。少人数学校の良さを発揮するためにも、当項目の肯定的評価をより一層向上させることは重要である。 ・児童のつまづきやニーズを把握し、個々の児童に適した指導方法を工夫している取組が充実している。授業のユニバーサルデザイン化により、多様な学習スタイルや能力に対応した教育が提供され、全児童が授業に参加しやすい環境が整えられている。特別支援学校との交流を通じて、相互理解や共感が深まり多様性を尊重する姿勢が醸成されている。これらの取組が、児童たちの学びや成長に大きく寄与しており、引き続き特別支援教育を推進していただきたい。 ・みんなの中で成長していけるように見守り、学び方の個性をいかす指導のあり方や個々の特性に合った支援について、その研究に期待する。
特別活動	○自主的・自治的活動の充実 ○異年齢集団活動の充実 ・スマイル班活動 ・委員会・クラブ活動 ・学級活動 ○ねらいに即した 振り返りの充実 ○主体的に活躍できる 場の設定	・委員会活動やクラブ活動では、児童が主体的に活動できた。 ・異年齢集団活動（スマイル班活動）では、学期に1回の大集会を児童が企画して実施した。その活動を通して、児童は、それぞれの学年の立場や役割について意識することができた。 ・低学年においても、係活動の発表会や季節イベントを自分たちで企画・運営するなどし、自主的に活動することができた。	B	・年間を通してスマイル班活動が少なかったため、業間などを利用して、遊びなどの異年齢集団活動（スマイル班活動）を実施し、異学年交流の機会を増やす。 ・自主的に活動を進めていたが、例年の踏襲した活動もあり、取組がマンネリ化していたように感じた。そこで、児童が成長や達成感を味わえるように、活動を振り返り、改善しようとする態度を育てる。 ・活動を通して、自分らしさを発揮し、それを認め合える学級・学校づくりに努める。	・評価Bは適切である。 ・比較的評価しやすい項目のように思われるが、教職員と児童、保護者の評点がかなり乖離している。 ・当番・係活動の評価が低い児童が少し多い。進んで取り組むという積極性についての児童の謙虚さが出ている可能性を感じる。加えて、少人数が故のウィークポイントである消極姿勢の醸成が背景にあるかもしれないため、取組の見直し、改善を図り、教育活動全般において積極さをより推進し指導していただければと思う。 ・特にスマイル班活動での異年齢集団活動により、相互の学び合いや協力関係が築かれ、児童たちのコミュニケーション能力やリーダーシップが育成されている。 ・委員会、クラブ、学活等主体的活動の場を設定した取組の成果がうかがえる。今後も、上級生が下級生の手本となるとともに、そのリーダー性を育むために、児童の主体性を尊重し、豊かな学びの場の提供をお願いしたい。
家庭・地域 との 連携	○「地域の中の学校」として 信頼される学校づくりの推進 ・広報活動の充実 ・「ふるさと学習」の充実 ・ボランティア（人材）の活用 ・異校種間連携の充実 ・家庭と連携した学力の育成	・保護者だけではなく地域の方々にもその都度広く学校行事参観のご案内をし、児童や学校の様子を見ていただいた。地区別教育懇談会も実施し、民生委員、区長、青少年補導員等、多くの方々からのご意見をうかがうことができた。 ・学校通信の地区回覧やHP更新により情報発信を行った。修学旅行や自然学校では、保護者に「すぐーる」で即時性のある情報発信をした。 ・1・2年生の町探検、3年生の環境体験学習、4年生の社会科学習・福祉学習等、実際に地域に出向き地域の方の思いを聞かせていただき、体験的なふるさと学習をすることができた。 ・「志染っ子かがやかせ隊」（人材バンク）の活用推進はできなかった。図書ボランティアについては、新たなメンバーも加わり読み聞かせや図書室内の整理や掲示物作成等を計画的にしていただき、教育活動に大変有効であった。 ・中学進学へのスムーズな接続に向け、緑が丘中学校区の各学校との連携を推進した。6年生の合同人権学習、5年生の自然学校で、中学校区の小学校と交流活動を実施した。市立・県立特別支援学校と地域校交流・居住地校交流の機会も計画的に持った。教職員も4校合同研修会を対面で実施し、9年間を見通したカリキュラムの見直し、9年間の学びの姿の共通理解等を進めた。 ・小学校へのスムーズな接続に向け、1・2年生があけぼの認定こども園と、緑が丘東幼稚園年長組と1年生との交流をもった。新入生についての情報収集を各園所との連携や体験入学での観察等でおこなった。 ・長期休業中だけではなく日々の家庭学習についても自立的に学べるよう、保護者への趣旨説明、児童への指導評価等を繰り返しおこなった。児童の発達段階に応じて系統的計画的に指導できるよう教職員間の共通理解を図った。	B	・学校行事や参観日等の学校公開を今後も計画的に行うとともに、学校からの便りやHP更新による情報発信をより積極的に行い、継続して地域とともにある信頼される学校づくりを推進していく。 ・「志染っ子かがやかせ隊」（人材バンク）の指導者による教育効果を上げるため、学校のサポート体制を見直し、構築する。 ・就学前各園所や中学校区の保幼こ小中連携について、交流活動の年間計画を見直し、スムーズな接続に向け、年度当初より継続して交流が行えるよう取り組む。 ・家庭のみならず、地域の関係協力者等にも「すぐーる」登録のすそ野を広げ、積極的な活用を進め、その連携を図る。 ・児童の主体的な学びの力を育成していくため、家庭・地域への啓発・連携・対話をすすめ、チーム学校としての協力関係・支援体制を構築していく。	・評価Bは適切である。 ・児童回答のうち、便りやHPを見ているという項目だけが著しく否定的評価が多い結果となっている。アンケートの設問が、学校での日常の指導とリンクしているのか否か疑問がある。アンケート結果と評価を直結すると、本問のような懸念が生じる恐れがあるため、アンケートの設問内容を検討する必要がある。 ・学校からの情報を保護者と児童が情報共有することができるように、学級懇談等で家庭での仕組みづくりを交流する機会を持つとよい。また、児童に学校からの便りを保護者に確実に渡す指導に加え、送信内容を吟味しながらすぐーるも活用していく。 ・子どもたちが地域を知る活動の大切さを実感する。地域の方の話を聞く、一緒に体験する、触れ合う活動を通して、志染が好きな子どもに育つことを願う。 ・保育所、認定こども園との連携、中学校区の連携、支援学校との連携をしっかり取り、親も子も不安なく次のステップが踏み出せるようにしていっていただきたい。 ・地域の中の学校として、地域の皆様からの信頼を得ている学校づくりの推進が顕著である。積極的な広報活動により、学校の取組や成果を地域に広く伝えることができ、地域との連携が強化されている。また、異校種間連携の充実により、地域内の教育リソースを最大限活用し、児童たちの学びの幅を広げている。さらに、家庭との連携を重視し、家庭と共に学力の育成に取り組むことで、児童たちの学習環境が充実し、学力向上につながっている。これらの取り組みにより、地域の一員として学校が密接に結びつき、地域社会全体で子どもたちの成長を支える仕組みが構築されている。引き続き、学校と家庭・地域との連携を強化していただきたい。 ・家庭との連携による学力の育成というのは、大きな課題である。啓発を図るための今後の具体的取組に期待する。